

|         |                                   |
|---------|-----------------------------------|
| 氏名      | 井田勝造<br>い だ しょう ぞう                |
| 学位の種類   | 医学博士                              |
| 学位記番号   | 論医博第71号                           |
| 学位授与の日付 | 昭和38年3月23日                        |
| 学位授与の要件 | 学位規則第5条第2項該当                      |
| 学位論文題目  | 木床義歯の医史学的研究<br>とくに、その応用材料と調製法の追求  |
| 論文調査委員  | (主査)<br>教授 鈴江 懐 教授 美濃口 玄 教授 岡本 耕造 |

### 論文内容の要旨

わが国固有のものと思っている木床義歯は、日本で独自の発達を遂げたと考えるが、その応用材料の種類や調整法は当時他の諸芸と同じく、口伝、書伝などの秘伝であったため、今日となつては、それらの資料がきわめて少なく、かつ木床義歯調製の体験者は近畿地区にて奈良の下村栄吉と滋賀の有田嘉市郎の娘、りん女の二人が生残さるのみであるから、医史学的に研究することは困難な現状である。そこで著者は大阪歯科大学所蔵の木床義歯72個と他の篤志家から提供された10個、合計82個について、その応用材料と調製法を追求したところ、多少の成果を収めたので、ここに補遺することにする。

① わが国固有の木床義歯の起源は1673年、大阪で発掘された、難波海老江の庄屋、羽間弥次兵衛浄心居士の下顎木床総義歯と、1675年、東京で発掘された、江戸の住人、柳生飛驒守宗冬侯が使用した鼠石人工歯併用の上下顎木床総義歯が発見されている。しかもともに優秀な精巧作品であることに徴しても、この木床総義歯がわが国にてすでに17世紀に完成していたことは確実である。

② この木床義歯を初めは単に入歯、また木で作った義歯だから木製義歯、木を彫刻して作った義歯だから木彫義歯などと名づけていたが、蒸和ゴム床義歯が渡来してからは、その西洋入歯に対して、皇国入歯というようになった。しかし他の諸種の床義歯にならい、木床義歯と名づけるのが正当であるから、爾後、この呼び名を用いることを提唱する。

そして、これには床と人工歯とが一木である。一木彫成木床義歯、床は木質であるが人工歯が蠟石、獸骨、人の天然歯などの異種人工歯併用の木床義歯がある。

③ したがって、一木彫成木床義歯でない他の材料の人工歯応用のものには、蠟石、獸骨、人の天然歯、象牙、異種木など併用した木床義歯がある。

④ そして異種人工歯併用の木床義歯が一木彫成義歯よりも症例が多い、これは審美観がよく、咀嚼効果などすぐれているためである。

⑤ これらの木床義歯は医史学的研究の結果、わが国人の独創になったものであることはほぼ確実であ

り、この点の詳細は渡部凡夫の論文に載っている。

⑥ 木床義歯の床材料としては主として黄楊木が使われ、人工歯材料としては蠟石、獣骨、象牙などが用いられた。

⑦ そして、人工歯の応用は上下顎とも一側の小臼歯から他側の小臼歯までであった。

⑧ お歯黒を付けたもの、ないし、黒色人工歯を応用したものがかなり多かった。

⑨ 彫刻した人工前歯の形態はおおむね生体の天然歯に準応している。

⑩ 木床義歯の調製には、自家考案になる種々の手用彫刻器具を用いたが、とくに鑿に工夫が払われたようである。

⑪ 木床義歯は審美観や、咀嚼効果の復元に十分留意されている。

⑫ 人工歯の結合には、短形（鳩尾形）応用と、一体のものが多く、結紮糸は三味線の細糸、または馬毛を使った。

⑬ 歯肉の形成は不十分である。

⑭ 機能の回復、床の接着維持を妨げる小帯にもかなり注意が行き届いている。

⑮ 床の厚径は現在の義歯に比べて幾分厚いが各所均一良好である。

⑯ 重さは、ゴム床や合成樹脂床に比べて軽い。

#### 論文審査の結果の要旨

木床義歯はわが国で独自の発達を遂げた優秀な歯牙補綴用具であり、外国に類を見ないものである。考古学的にこれを見ると、延宝元年（1673年）60才で死没した大阪難波海老江の庄屋羽間弥次兵衛浄心居士の下顎木床総義歯、延宝3年（1675年）63才長逝した江戸の柳生飛弾守宗冬侯の蠟石人工歯併用の上下顎木床総義歯などの出土品にてらしても、すでに欧米の Fauchard の総義歯の製作（1737年）に先んじていちじるしく発達していたことが知られる。後年、外人の歯科医から蒸和ゴム床義歯が伝えられ、ぜんじそれに移行したが、少なくとも木床義歯は上限は徳川時代の初期前後、その下限は明治時代の中期をややくだった頃と推定される。ところが、本邦固有の木床義歯も多くは口伝秘伝によってその技術が隠匿せられ明確な記録がほとんどなく、現存する木床義歯も今や国内で200個たらずと考えられ、またその製作体験者もおおむね死にたえ、今や本資料の調査整理は焦眉の急を要する問題と考えられる。かくて著者は著者の教室の渡辺凡夫につづき本研究を企図したのである。

その研究成績はおよそ4部に分けて記され、(1)医史学的回顧、(2)木床義歯の材料、(3)木床義歯の製作法、(4)現存木床義歯の調査成績となっている。ことに医史学的回顧に関しては多くの古文獻を渉獵し、昔の引札や広告の類にいたるまで蒐集して研究、また応用材料、調製法などの追求にあたって、著者の母親が木床義歯製作者の娘である関係などもあり、豊富な資料を駆使して詳密かつ徹底的な観察を試み、木床義歯の医史学的研究にあますところなき完全な記録を達成しているのである。

以上のように本業績は医学上きわめて興味深くかつ有益貴重なものであり、したがって本論文は医学博士の学位論文として価値あるものと認める。